

業地は周知の埋蔵文化財包蔵地「新城町第1遺跡」に近接することから平成27年12月21日に試掘調査を実施、中世～近世の埋蔵文化財が確認されたことから、宮崎県文化財課は新規の埋蔵文化財包蔵地「平城遺跡」と認定した。

市文化財課はこの調査結果を受けて民間事業者と協議を行い、住宅部分は埋蔵文化財に影響を及ぼさない工法で施工するが、駐車場は道路と同程度の高さまで削平することから、埋蔵文化財の影響を免れないため、本発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は平成28年1月26日から2月5日にかけて実施した。

第2節 調査の経過

調査は、バックホウにて表土を剥いだ後、人力にて遺構検出を行った。調査前は宅地であったため、戦後のゴミ穴などの攪乱が激しかったが、中には近世に遡る陶磁器片も混じっていた。暗黄褐色の粘質土で検出を行ったところ柱穴らしきピットを確認した。

第三章 調査の成果

第1節 基本土層

調査区は地表面下に表土があり、その下層に暗黄褐色粘質土が堆積する。遺物包含層はなく、後世の造成時に削平されたと考えられる。この暗黄褐色粘質土層は、宮崎平野における沖積平野の遺構検出面である。なおこの下層には灰褐色砂質土が厚く堆積している。

第2節 検出遺構(第5図)

遺構はピットのみである。本調査において27基検出された。全体的に径約20～40cm、深さは20～40cmの規模に収まる。形状から掘立柱建物の柱穴の可能性が高いが、配置に規則性は見られなかった。以下、埋土から遺物や礫が出土した3基を説明する。

P1は調査区中央よりやや東寄りで検出した。検出面の径は25cmであり、やや窄まりながら深さ40cmで底面に至る。断面はU字状を呈する。底面付近から7点の小ぶりの角礫と共に遺物が4点出土した。1～3は小皿である。底面には糸切りの痕跡が残る。4は破片のため定かでないが、甕の可能性が高い。P2は調査区北東隅部で検出した。長軸40cm、短軸30cmの長円形を呈しており、途中段を持ちながら深さ25cmで底面に至る。検出面付近より、平坦面に磨耗のある礫が出土した。P3は径約35cmのやや歪な円形を呈しており、やや窄まりながら深さは20cmで底面に至る。底面付近より扁平な円礫が2点出土した。

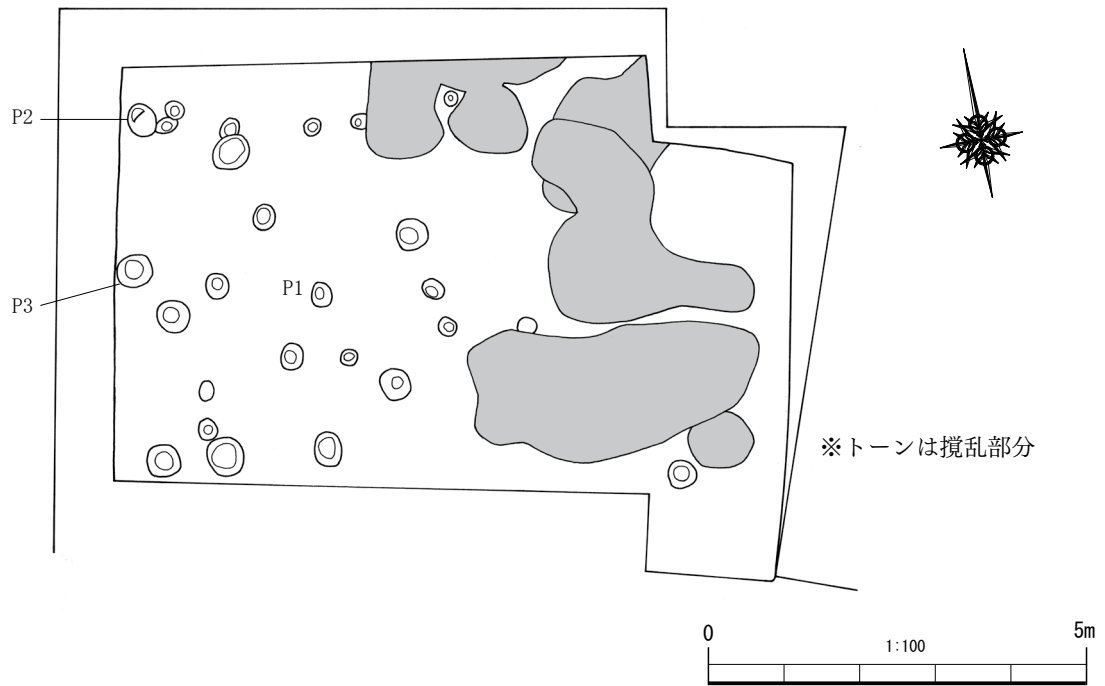
第3節 攪乱中の出土遺物(第6図)

調査区の北や東の調査区端部は攪乱が数多く見られた。埋土中には近現代の工業製品が認められたため、戦後のゴミ穴と考えられる。この中には近世の遺物も混じっていたため掲載した。

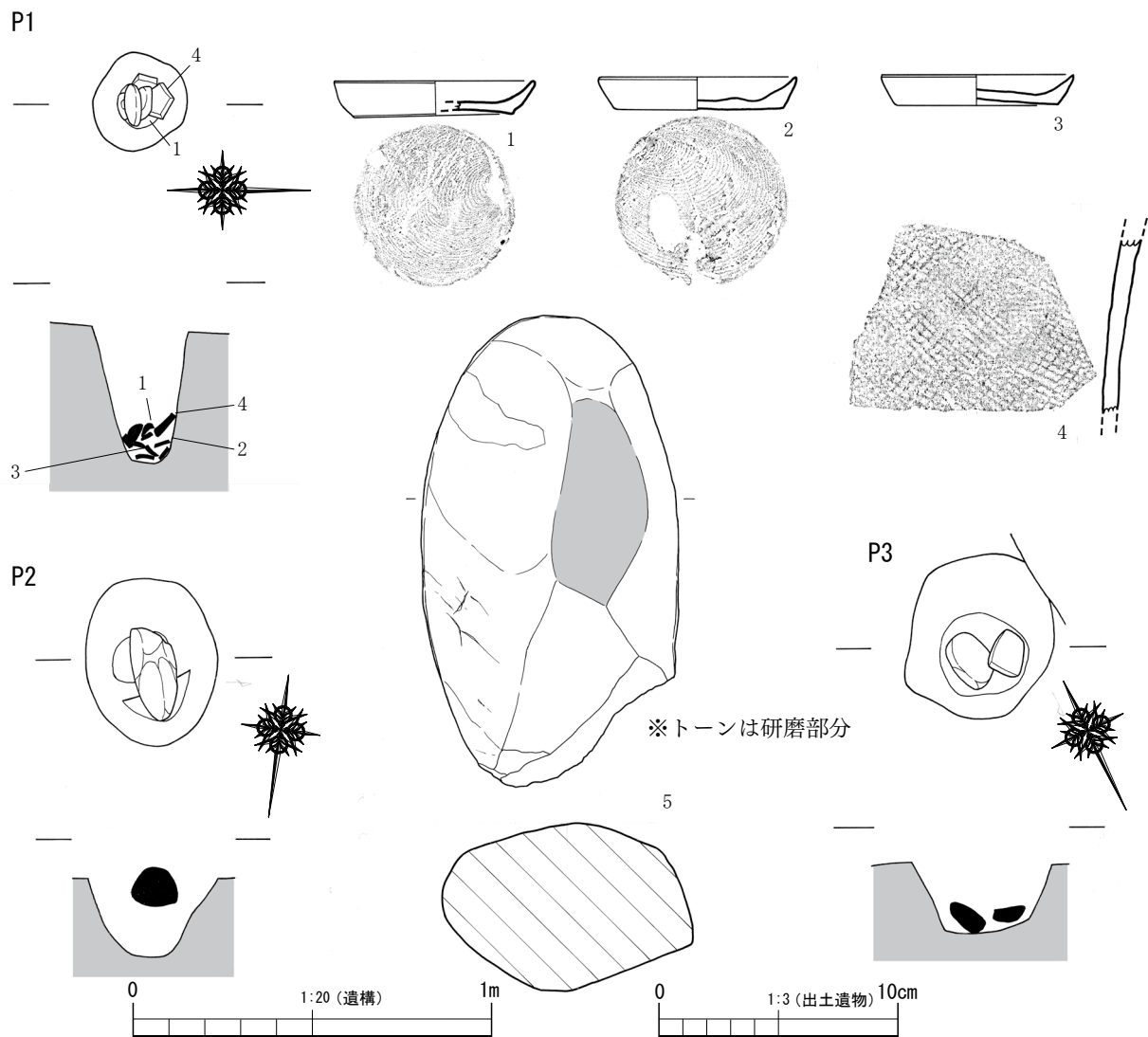
6～10は陶器であり、花瓶である10以外は全て碗である。11～20は磁器もしくは染付である。器種は盃や蕎麦猪口、大皿、輪花皿、香炉等豊富である。21は焙烙である。22はガラス製の簪の先端部である。23は建物の棟の端に置かれた飾り瓦の一部と思われる。このほか図化不可能であったが、佐土原人形と思われる素焼き人形の破片も多く混入していた。

第四章 総括

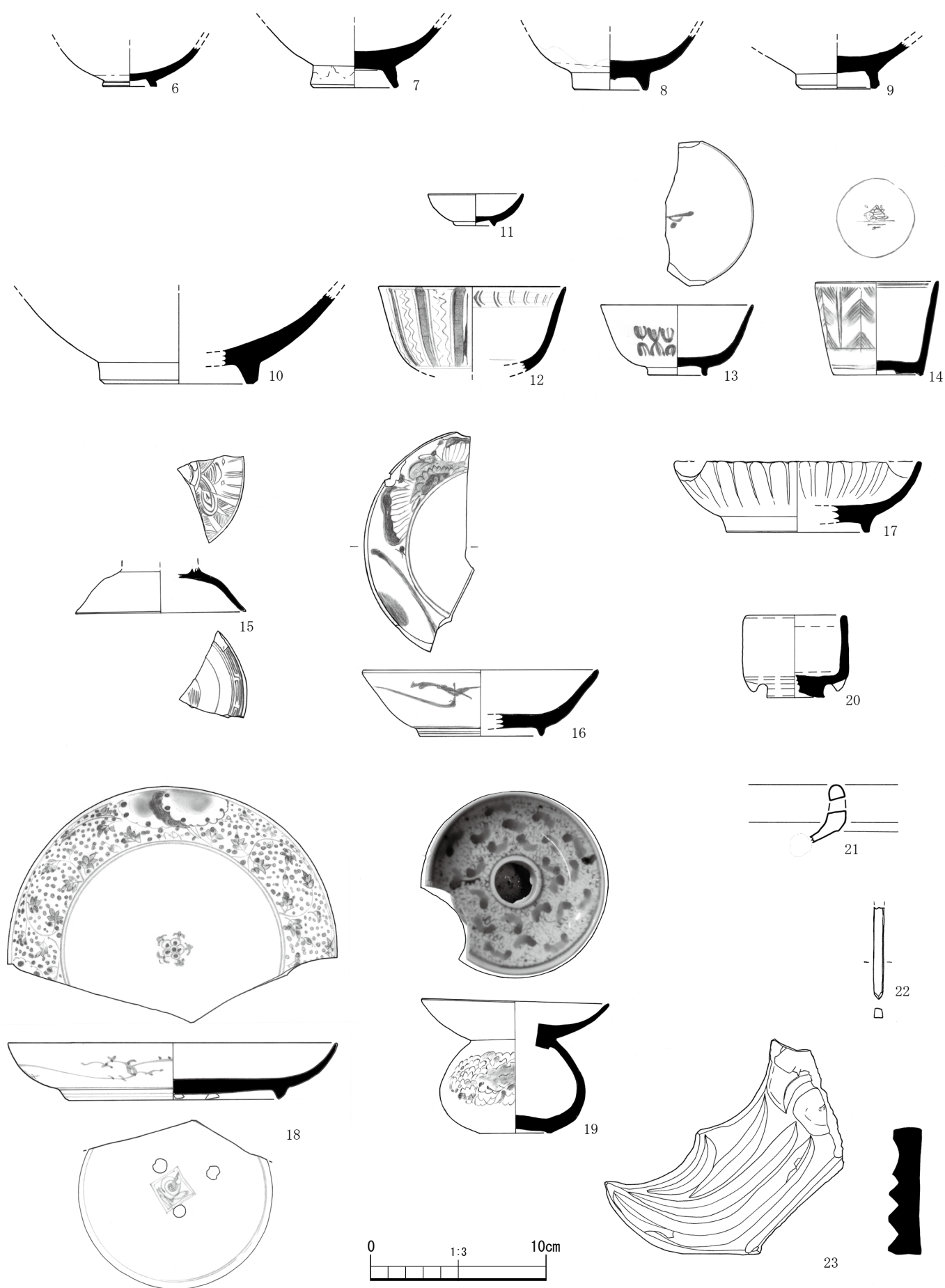
P1は、土師器小皿の埋納が確認されたため中世の所産と考えられる。出土状況から、埋納目



第4図 平城遺跡遺構分布図



第5図 平城遺跡検出遺構及び出土遺物実測図



第6図 平城遺跡出土遺物実測図

的で構築したピットか、廃絶後の柱穴を再利用した埋納遺構と考えられる。

降矢哲男氏は、九州島内において土坑や柱穴から土師器の坏や小皿がまとまって出土する事例を集成しており、宮崎県では都城市都之城跡、久玉遺跡、松原第1遺跡やえびの市弁済天遺跡など県西部の遺跡が紹介されている。氏はこのような遺構の性格を「地鎮め」と位置づけているが、P1も同様の目的を持っていた可能性がある。なお降矢氏は、このような遺構は全国的に城郭や寺院と関連が深い傾向にあるとしている。本遺跡は、調査地周辺に平城、新城町と、城館の存在を想起させる地名が残されることは興味深い。

P1以外にも、調査区からはピットが多く検出された。これらの時期は手がかりがなく不明であるが、平城遺跡周辺は十文字組と呼ばれる下級武士の居住地にあたり、幕末（安政年間）に描かれた「佐土原城下絵図」によると、今回の調査地には「本田平之丞」という武士の名がある。同時期の佐土原藩の分限帳では、本田平之丞は13石取りの徒歩と記されている。本調査で確認されたピットの多くも近世の武家屋敷に伴う柱穴であろう。

《参考文献》

吉本正典 2018『一ツ瀬川下流域右岸の古墳時代後期～古代の遺構群』宮崎考古 第28号

降矢哲男 2003『九州地方における地鎮めの様相』『続文化財学論集』

第1表 平城遺跡出土土器観察表（1）

遺物 番号	出土 遺構	種別	器種	法量():復元			色 調		焼成	調整		胎土	備考
				口径	底径	器高	外面	内面		外面	内面		
1	P1	土師器	小皿	8.2	6.6	1.6	にぶい褐 7.5YR3/3	灰褐 7.5YR4/2	精良	回転横ナデ	回転横ナデ 底面:糸切り痕		
2	P1	土師器	小皿	8.2	7.1	1.4	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい褐 7.5YR5/3	精良	回転ナデ	回転横ナデ 底面:糸切り痕		
3	P1	土師器	小皿	7.9	6.7	1.3	にぶい褐 7.5YR 5/3	にぶい褐 7.5YR 5/3	精良	回転ナデ	回転横ナデ 底面:糸切り痕		
4	P1	土師器	甕	—	—	—	にぶい褐 7.5YR5/3	にぶい褐 7.5YR6/4	精良	格子目タタキ	ナデ	長石 5mm以下:多量	
21	攪乱	土師質	焙烙	—	—	—	にぶい赤褐 5YR 5/4	にぶい赤褐 5YR5/4	精良	回転ナデ	回転ナデ	長石 5mm以下:多量	外面に スス付着

第2表 平城遺跡出土土器観察表（2）

遺物 番号	出土 遺構	種別	器種	法量():復元			産地	時期	備考
				口径	底径	器高			
6	攪乱	陶器	碗	—	3.0	—	関西	近世	
7		陶器	碗	—	4.6	—		近世	
8		陶器	碗	—	4.1	—		近世	
9		陶器	碗	—	4.6	—	薩摩	近世	
10		陶器	花瓶	—	(8.4)	—	肥前	近世	
11		磁器	盃	5.2	1.2	0.9	肥前	18C	
12		染付	端反碗	(10.5)	—	—	肥前	1820～1860	
13		染付	碗	8.6	3.0	4.0	瀬戸美濃	1820～1860	
14		染付	蕎麦猪口	6.3	4.8	6.8	肥前	1780～1820	底面蛇目凹形
15		染付	端反碗蓋	(9.9)	—	—	肥前	1820～1860年	
16		染付	小皿	13.2	7.0	3.7	肥前・波佐見	18C後半	砂目積
17		磁器	輪花皿	(13.7)	(8.0)	4.0	肥前	近世	
18		染付	大皿	18.5	11.8	3.3	肥前	18C第2・第3四半期	角渦福 底部手書き 砂目積
19		染付	花瓶	10.6	4.0	7.5	肥前	近世	
20		青磁	香炉等	5.8	3.3	4.6	肥前	近世	非実用品か